

先土器時代の山口地方

—遺跡の分布と立地—

木村元浩

1 はじめに

遺跡とは過去の人間・人間集団の生活空間（遺物・遺構を含む）を指すと言える。現在我々が住んでいるこの場所もいつしか遺跡として認定されるものであろう。そしてこの時、遺跡の分布状態がいつの時代においても微・巨視的両立場で過・疎あるいは無という偏りがあることに気付くはずである。

今なぜここに我々が住んでいるのかを考える時、見晴らしあるいは日当たりが良いとか、また通勤に便利であるとかの、自然的・社会的諸条件が重なりあっていることを見出す。生活を営む上で最良のこの土地を選んでいるのであって、狩猟・採集生活下と考えられる先土器時代においても、この土地というものが限られた条件の中にあっても選びぬかれた

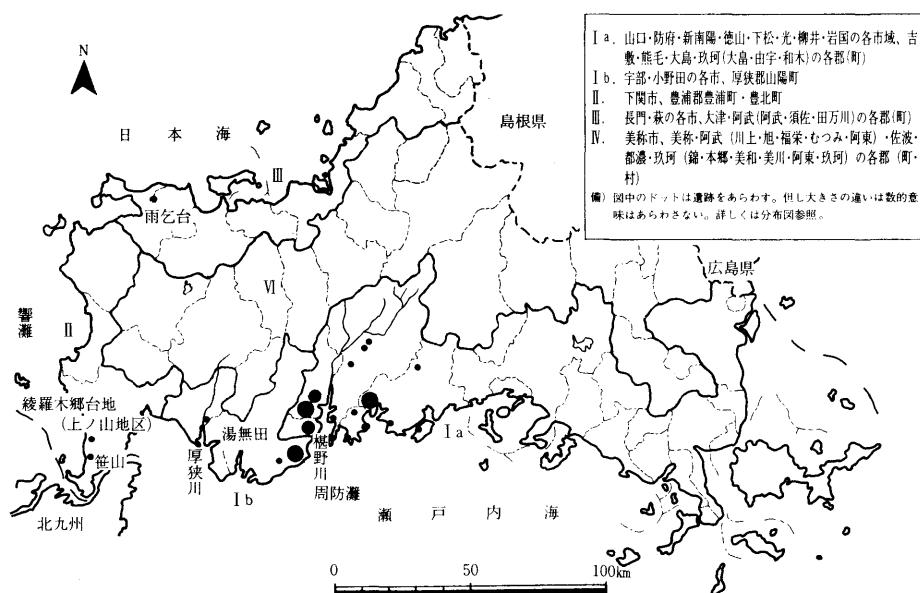


Fig. 96 山口地方地域別遺跡分布

ものであることを、強く再認識しておきたい。

2 研究史とこの稿での視角

ここでいう山口地方とは本州西端部を指し、行政区画では山口県域を示す。

山口地方の先土器時代研究は、1982年の山口県旧石器文化研究会の設立に伴い、精力的・総括的な調査・研究が、現在研究会を中心に行なわれている。

もともと山口地方における当期の遺跡は、良好な厚い火山灰層に遺物を含むということ少なく、時期を違えた石器が混在している状況である。このような中、何とか手掛かりを得たいとする当期の研究活動の中で、特に石器形態学の視角により、遺物の資料化に主眼を置いた活動がなされている。これは必然的とも捉え得るものではあるが、現在までこの基礎データの公表が積極的になされ、集成されつつある。また、層位との連関での石器群の検出を目的とした発掘調査も行なわれており、当期研究を大きく推進している。^{1), 2)}

研究会設立以前には長沢考古学研究グループ、また防府考古学会が、宇部台地を中心として広く表採活動、そしてその資料をもとにした分析・考察を行なっており、現在知られる遺跡のほとんどが彼らの手になるものであると言っても過言ではない。

そして現在山口県旧石器文化研究会は、在野のグループを含む形で構成されているが、一般市民の自由な参加等、とくに狭く堅苦しくなりがちな考古学・歴史学の中において、地域住民への幅広い環元を実践している側面から、大いに評価されるべきものであろう。

発掘例が少なく、多くの表採遺物を見るこの地方において、それに基づく遺跡の立地・規模・時期あるいは個々の遺物の形態学的研究は、先学に多くの功績を見ることができる。この稿もそれらと同一の手順を踏むものではあるが、加えて分析データの提示を行ないたい。そして最終の目的は、現時点における山口地方先土器時代遺跡の分布を集成・把握しておくことにある。

3 遺跡内容とその分布

山口地方においては、現在公表されているもので61ヶ所以上の先土器時代の遺跡が確認されており、^{注1)}細石核・細石刃を出土する細石器文化期のもの23ヶ所、ナイフ形石器を出土するナイフ形石器文化期のもの53ヶ所、そしてそれ以前と考えられる文化期の、大きく3時期に分けられそうである。ここで今から約3万年前からの遺跡をまとめるにあたり、仮に山口地方をI・瀬戸内海沿岸、II・響灘沿岸、III・日本海沿岸、IV・I～IIIに含まれな

遺跡内容とその分布

Tab. 12 地域別石器内容一覧表

地区 (遺跡数)	器種																		計		
	細石核	細石刃	ナイフ形石器	スクレイパー	剝片	舟底形石器	尖頭器	二次加工の剝片	使用痕を有する剝片	彫器	台形石器	楔形石器	石核	打面調整剝片	剝片	石斧	両面加工石器	周辺加工石器	打石器	石錐	
I	a (38)	5	11	33	8	0	1	2	1	2	0	1	0	2	2	19	0	0	0	0	87
	b (20)	7	8	18	9	3	9	4	0	0	1	5	3	4	3	8	1	1	3	1	89
	計 (58)	12	19	51	17	3	10	6	1	2	1	6	3	6	5	27	1	1	3	1	(176)
II (2)	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
III (1)	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
計(61)	13	20	53	17	3	10	7	1	2	1	6	3	6	5	28	1	1	3	1	1	182

い内陸部という四区分に分けて見ると、遺跡の分布は I 地区を除き他は皆無な状況となる。そして I 地区は防府・山口市域を中心とするもの (Ia 地区)、宇部市周辺のもの (Ib 地区) に分けられそうである。これから先、若干の分析を行なうが、あくまで現時点のものであり、やはり踏査の精度が問題にされることを断っておきたい。

山口地方各遺跡で普遍的に出土する石器にはナイフ形石器があり、他には剝片を除けば細石核・細石刃・スクレイパーが挙げられる。ナイフ形石器については、61 遺跡中約 9 割の 53 遺跡で見られ、他の 3 器種については、I 地区において約 1/3 の遺跡で見られる。Ia・Ib 区分という観点からは、ナイフ形石器は各々 9 割、そして 3 器種については Ib 地区の方がより高い割合を示す。また Ib 地区では舟底形石器が多く見られることに注目しておきたい。他の少量の器種も考えあわせると、Ib 地区、中でも宇部台地西岐波区地区においては器種が豊富であると言えよう。なお、Ia 地区の遺跡では 2 器種、Ib 地区の遺跡では 4 器種、計算上平均 3 器種をもつという勘定になろうか。

山口市嘉川・江崎地区は 1 点のみ石器 (ナイフ形石器) が見られるところであり、防府市大道・右田地区でも同様である。吉敷郡秋穂町においてもこの傾向はあるが、若干他の器種が入る。このように Ia 地区では、ナイフ形石器の在り方が極めて特徴的である。またナイフ形石器と細石核・細石刃の両者を見る遺跡が 10 遺跡 (約 1/4) あり、これらの分布も、数地区にまとまる傾向にある (山口市鋳銭司、防府市台道、吉敷郡阿知須町付近)。なおナイフ形石器と細石核・細石刃の数は、遺跡によってかなりの偏りがある。

Ib 地区については、まず器種が豊富であることを先に述べたが、具体的には台形石器・剥片尖頭器・楔形石器そして舟底形石器等である。これらは Ib 地区全遺跡に共通するものではなく、各遺跡によって大きな差をもつ。10器種近くをもつ 5 遺跡によって、Ib 地区の「器種が豊富」ということが目立つのであり、他の遺跡に関しては 3 器種程度で、1 器種のところも少なくない。ナイフ形石器と細石核・細石刃の両者が見られる遺跡は全体として豊富な器種をもっており、3 器種程度の遺跡においてはほとんどみられない。それは常盤池周辺、西岐波区地区に限定される。また個々の遺跡を例にとると、ナイフ形石器と細石核・細石刃の出土数は数量的に比例関係にあり、またその逆も言えることがわかる。

使用石材に関してはどうであろうか。I 地区では、黒曜石・安山岩の占める割合が高い。各々約半数の遺跡で選択的に用いていることがわかる。次いで水晶の割合が高いが、これは約 1/4 になる。他にチャート・メノウ・玻璃質安山岩等がある。

黒曜石を用いる遺跡は、山口市鋸銭司 (Ia)、吉敷郡秋穂町 (Ia)、宇部市西岐波区地区 (Ib) に集中して分布する傾向にある。安山岩は山口市嘉川・江崎・陶 (Ia)、吉敷郡秋穂町 (Ia)、宇部市西岐波区地区 (Ib) に集中することがわかる。これらから、黒曜石と安山岩はほぼ同じ分布域（但し、安山岩においては山口市嘉川・江崎・陶地区に 1 つの集中部を形成しているようである）を示すと言えよう。なお、チャート・メノウは宇部市西岐波区地区に、玻璃質安山岩は吉敷郡秋穂町を中心として見られる。

このように、黒曜石と安山岩を主体として、他の石材が若干混じるという石材利用の在り方から、黒曜石と安山岩との共伴石材を見ると、黒曜石（あるいは安山岩）が出土する遺跡では、安山岩（あるいは黒曜石）が共伴する場合と、単独に近い形で見られる場合とに分かれる。宇部市西岐波区地区では黒曜石・安山岩を核として他に多くの石材が混じり、吉敷郡秋穂町を中心とする地区では安山岩に玻璃質安山岩が多く共伴することがわかる。また、単独に近い形で見られるものとして、安山岩が前述の山口市嘉川・江崎・陶地区、そして黒曜石では吉敷郡秋穂町・阿知須町付近が挙げられよう。

黒曜石・安山岩を主体とする石材利用の在り方は大きく捉えたものであり、やはり個々の遺跡ごとに大きな偏りがある。前述の器種を考え合わせて見ていただきたい。

注2)

ここで個別の遺跡を若干見ていくことにしたい。

Ia 地区の幸崎遺跡では安山岩製のナイフ形石器が顕著であり、細石核・細石刃では黒曜石製のものが多く見られる。遺跡自体は安山岩の使用率が絶対的優位を占めるという。藤尾遺跡では玻璃質安山岩・黒曜石が多く用いられ、ナイフ形石器においては玻璃質安山岩、

遺跡内容とその分布

Tab. 13 地域別使用石材一覧表

石材 地区 (遺跡数)	姫島 産 黒 曜 石	黒 曜 石	玻 璃 質 安 山 岩	安 (サ ヌを 山 カ含 イむ 岩ト)	チ ヤ 1 ト	珪 質 頁 岩	頁 岩	水 晶	流 紋 岩	メ ノ ウ	結 晶 片 岩	玉 ず い	シ ル ト 岩	計
I	a (38)	1	20	8	20	2	1	3	8	1	1	1	0	67
	b (20)	0	12	3	12	7	0	4	7	1	6	1	3	60
	計 (58)	1	30	9	31	9	1	7	15	2	7	2	4	(123)
I (2)		0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
II (1)		0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計(61)		1	34	11	33	9	1	7	15	2	7	2	4	130

Tab. 14 各遺跡における
器種別使用石材

石材 器種	黒曜石	玻璃質 安山岩	器合 種 計
ナイフ 形石器	13%	40%	30以上
藤 尾 (la)	細石刃核	95%	3以上
	細石刃	50%	30%
石材合計	40以上	30以上	100以上

石材 器種	安山岩	黒曜石	玻璃質 安山岩	器合 種 計
ナイフ 形石器	33%	23%	23%	30以上
長 柵 (la)	細石刃核		90%	5%
	細石刃	2%	95%	1%
石材合計	25以上	160以上	15以上	230以上

石材 器種	水晶	器合 種 計
ナイフ 形石器	100%	4以上
石材合計	45以上	60以上

石材 器種	頁 岩	玻璃質 安山岩	黒曜石	器 種 計
ナイフ 形石器		25%	25%	4以上
細石刃			95%	10以上
石材合計	2以上	3以上	10以上	24以上

石材 器種	黒曜石	安山岩	器 種 計
ナイフ 形石器		20%	40%
細石刃	70%	5%	35以上
石材合計	70以上	60以上	200以上

細石核・細石刃では黒曜石製のものの割

合が大きくなるとされる。他に特徴的な

ものとして宮ノ前遺跡があり、これは実見した限り、ナイフ形石器はすべて水晶製である。

そして細石核・細石刃の出土は確認されていない。

Ib 地区ではまず、長柵遺跡において黒曜石製の石器が目立つ。しかし重量の面からは、

実質多く用いられたのは安山岩とされ、ナイフ形石器にはその安山岩が、細石核・細石刃には黒曜石が、それぞれ多用されるという。黒曜石製の細石刃の多さはこれを如実に物語っている。そして南方遺跡では、安山岩・黒曜石・玻璃質安山岩・水晶等多様の石材が見られる。重量の面からは、これらの使用頻度はほぼ同じであると言われる。ナイフ形石器には黒曜石・玻璃質安山岩が多く、細石核・細石刃になると黒曜石製のものが顕著となる。そしてその占める割合は、他の石材に比較してぐっと高くなるとされる。また上ノ原遺跡における細石刃は、全て黒曜石製のものである。なおナイフ形石器には、玻璃質安山岩・黒曜石製のものが見られる。白土遺跡においても細石核・細石刃は黒曜石製であり、現在のところナイフ形石器の検出はない。

以上のことから、Ia 地区では時期が新しくなるにつれ、黒曜石の使用頻度が高くなることが窺えよう。また Ib 地区においても、長柵遺跡に代表されるように、黒曜石の使用度が次第に高くなることを推測できる。個々の遺跡によって、例えば水晶の使用度が時期により違ってくるといった傾向はあるが、使用石材とナイフ形石器文化あるいは細石器文化といった文化期との関連において、I 地区では安山岩製に代表されるナイフ形石器文化から、黒曜石を多用する細石器文化への変遷が読み取れよう。しかしながらこのことは、全く石材が入れ替わるという性格のものではない。またナイフ形石器のみを出土する遺跡の集中地区について、山口市嘉川・江崎地区 (Ia) では安山岩製を主とするが、防府市大道・右田地区 (Ia) ではそれが黒曜石製であることに注目しておきたい。最後に石材産地に関して、山口市仁保でも水晶が採れることを最近知った。付け加えておきたい。

4 先土器時代の環境

先土器時代の気候は一般に現在よりも寒冷であったといわれる。気候の変化自体が直接人々の生活に影響することは稀であっても、それに伴う植生・動物相・地形等の変化が人類の生活手段に大きく関わったことは間違いない。ここで、先土器時代の山口地方はいかなる環境であったのか、一度戻る形になるが、自然環境を中心に見ていただきたい。

当期の山口地方は第四紀研究の分野において、最終氷期後半と呼ばれる時期に当たる。この中で最寒冷の時期（極寒期）を約1.8万～2万年前、あるいは約3万～3.5万年前とする説があり、気温は現在よりも年平均にして約6℃ほど低かったといわれる。このように、人類はあらゆる自然環境の変化に順応しつつ、対応を繰り返した。以下、約1.8万～2万年前の最寒冷期を中心に見ていただきたいが、いわゆる氷河期というものをこれで代表し

ておきたいということと、比較的研究が進んでいること、またナイフ形石器文化の盛隆時に当たるという理由による。

まず寒冷な気候は海水準の低下をもたらした。山口地方においては瀬戸内海が陸続きになることで現高知県沖まで海岸線が下り、日本海側も大きく張り出していた。西部の響灘沿岸においては朝鮮半島との陸続きも考えられている。^{注3)} 海水準の低下は土地の拡張をもたらし、行動範囲の拡大を促した。現在の九州や四国とも陸続きであるということに、容易な行動（交易）が想定できる。領地の拡大つまり他集団・他文化との積極的な接触という図式が考えられよう。

人々が生活を行なう上での必要不可欠な条件とは、食料の確保にある。狩猟・採集経済下と考えられる先土器時代にあって、大きな割合を示すものは採集ではなかったか。それは確実性ということからも類推できることである。つまり、植生・植物相というものが実際には彼らの生活空間を強く規制していたのではないか。動物相を全く無視していたとは考えられないが、しかしそれは付隨的なものではなかったか。採集のみで生活し得るほどの土地基盤が必要であった。という前提に立てば、同一場所に長く居ることはできない。³⁾ 食べ尽くす前に、つまり自然の破壊の前に移動する必要がある。これは、先土器時代の頻繁な移動の一面を表す大きな要因になり得る。

この時期の山口地方は、カエデ・クリ・ブナ等を含む冷温帯落葉樹林（冷温帯針広混生林）に属しており、瀬戸内海沿岸・響灘沿岸ではブナを伴わず、日本海沿岸では若干のブナを伴うという植生に分かれる。この植生を提示するに重要なことは、ここに可食植物を見出せることであろう。ここではクリ・ブナをはじめハシバミ・クルミ・トチノキ等が見られる。当寒冷期にはこのような可食植物が多く見られることに注目する必要がある。

この寒冷期を過ぎると気候は次第に温暖化に向かう訳だが、これに伴い温暖帯落葉広葉樹林、照葉樹林が広く分布するようになる。この植生からの可食植物という観点ではシイ・カシ類が挙げられるが、寒冷期に比べるとそれはかなり少なくなると言われている。寒冷下の時期において豊富な食物に恵まれていたことを記しておきたい。

動物相について考えるとき、陸橋の問題が大きく関わってこよう。つまり、海水準低下により外来種と呼ばれる新しい動物群が日本列島に入ることである。これらは主として北方より樺太・北海道を経由してきたもので、研究によれば最終氷期後半の最寒冷期よりは前ではなかったかと言われている。現存種と外来種の混合が考えられ、言葉をかえれば最終氷期後半での（哺乳）動物相は北方系要素をもったものと温暖系要素のものの混合であ

ると言える。具体的には、いわゆるマンモス動物群と黄土動物群であり、マンモス・ヘラジカ・ヒグマ・ナウマンゾウ・ヤベオオツノジカ・ハタネズミ・ノウサギ等である。山口地方においてもオオツノジカ・ナウマンゾウ・ヒグマといった化石が見つかっている。

動物相の研究は植物相のそれと比べると困難な面が多く、よって化石の発見例を待つという状況にあろう。山口地方に焦点を絞って考えることも今のところ不可能に近い。我々にとって最も重要なのは、山口地方の先土器時代人が、何の動物を狩猟対象としたのか、狩猟対象となり得る動物とは、をはっきり特定することであり、考古学資料からのアプローチを絶えず行なう必要がある。

5 遺跡の立地

ここでは、遺跡の一集中地区 Ib を中心に見ていく。この中でも遺跡の集中がいわゆる宇部台地に認められることは先に述べた。宇部台地とは行政区画では宇部市を中心に西は小野田市、東は阿知須町・小郡町・秋穂町・防府市にわたる広大な洪積台地の総称であり、瀬戸内海側は海岸段丘が非常に発達したところである。

宇部地域の洪積層は吉南層群と呼ばれ、その層序は下部から黒崎礫層・黒崎粘土層・宇部砂礫互層・宇部火山灰層・宇部砂質粘土層から成る。当台地は陸上で確認されているもので、三段の海岸段丘が見られ、段丘面は上から標準的に王子面・古殿面・丸尾原面と呼ばれている。さらにその下に沈水段丘としての宇部沖面が確認されている。

アルプス地方の四大別氷期と対比すれば、王子面形成期はミンデル・リス間氷期に、古殿面形成期はリス・ウルム間氷期に、丸尾原面はウルム氷期に比定され、さらにウルム氷期末に宇部沖面が形成されたとされる。

そして台地は、小河川によって開析谷が存在し、多くの浅谷が隨所に見られる。よって独立丘陵状の地形ができあがっている。遺跡が集中する宇部市西岐波区においては特に顯著である。西岐波区に集中する遺跡群は、沢波川と浜田川によって挟まれる台地上に位置する。南方裏遺跡を除くと、沢波川の左岸に本郷・長樹第1地点・長樹第2地点・神楽田・南方の各遺跡が、そして浜田川の右岸に上ノ原・白土・西吉沢・宮ノ後遺跡が両河川に沿う形で見られる。吉田遺跡も吉田川の左岸に、岡ノ辻遺跡も小河川の右岸に位置する。もう少し詳細に見ると、各遺跡は南北方向の片側に河川を望む急斜度な地形をもち、周囲に浅い谷を見るという独立丘陵上に位置している。しかもその縁辺（先端）部に立地するという共通点が窺える。現水田面との比高差も、最低5m前後あり、多くは10mになる。こ

のように特徴的な遺跡立地をここでは沢波川・浜田川といった視点を含めたうえ、浅谷に重点を置いた何らかの要因を考えておきたい。静岡県磐田原台地・宮城県江合川流域の遺跡立地要因等も充分考えられるが、この件に関しては時期を改めたい。
注4)、14)、27)

なお、各遺跡の立地する場所は、地形斜 $3^{\circ} \sim 8^{\circ}$ におさまることを付け加えておく。

次に、資料紹介という形で、先土器時代研究の基礎データを提示したい。

山陽町発見の新資料

ここに発表する資料は、河野豊彦氏の長年にわたる踏査により採集されたものである。氏は宇都市を中心とする他の遺跡の立地を基に、小野田市・山陽町を中心に、現在も精力的に踏査を続けておられるが、昭和59年を最初に現在まで採集されたものが今回の資料である。遺物は厚狭郡山陽町大字郡字湯無田2974番地に所在する湯無田溜池（これより湯無田遺跡と称する）からのもので、山陽町内における先土器遺跡の発見はこれが初めてである。

以下先土器時代の遺物を中心に構成するが、まず未発表資料の公表について快諾頂いた河野豊彦氏に感謝の意を述べたい。

1 遺跡の立地と環境

湯無田遺跡のある山陽町は、厚狭郡に属する周防灘沿岸の地域であり、国道2号線が東西へ走る。農業が基幹産業であり、稻作を中心に野菜の栽培も盛んである。農業の面では戦後まもなく入植者による干拓農業が行なわれた。ここでは現在ブドウの生産・養鶏が主として見られており、ブドウについては町の代表的な産物になっている。

山陽町内の地形は大きく山地、丘陵、低地の三つに分かれる。丘陵は低い方から代表して厚狭丘陵、山陽丘陵と呼ばれ、各々瀬戸内下位面、瀬戸内上位面に比定されている。低地には厚狭、後瀬^{うしき}、埴生^{はぶ}の各低地があり、特に、後瀬低地は大部分が干拓地で構成される。東部には長門山地に源を発する厚狭川が南流しており、河口付近は干拓が進んでいる。山陽町内においては開作地へのかんがい用の溜池が無数にあり、湯無田溜池もその一つである。後瀬低地に水を供給する湯無田溜池は、後瀬低地から山地地形に向かってみられる二段の段丘のうちの上方の段丘面にあり、ここはいわゆる宇部台地の古殿面に比定できそうである。山陽町内における遺跡の分布は、現在のところ厚狭地区を中心にして厚狭川の右岸に集中する傾向が窺える。これまで、厚狭川河口付近の左岸には遺跡の存在はほとん

先土器時代の山口地方

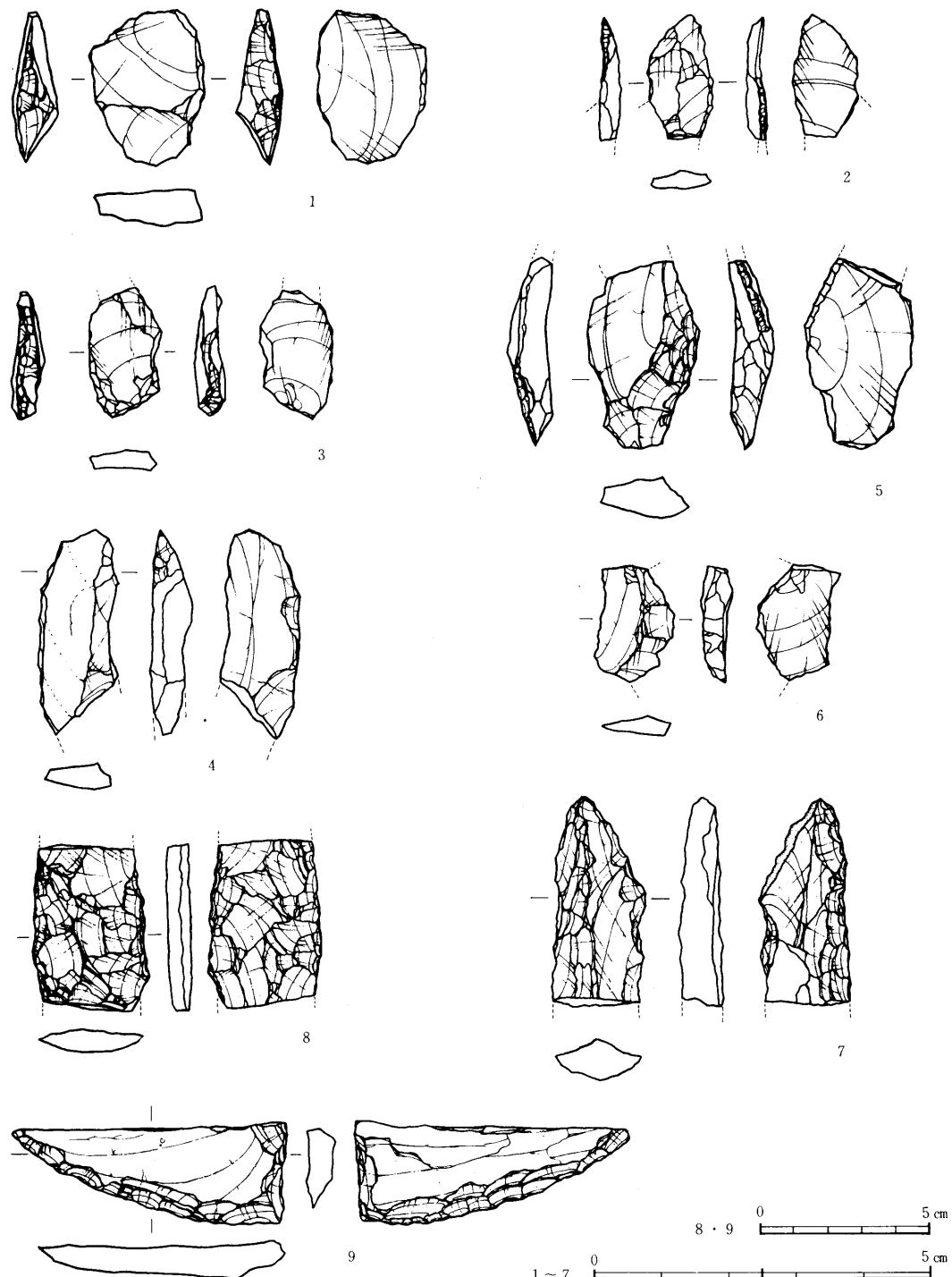


Fig. 97 湯無田遺跡の石器群

ど知られていなかったが、湯無田遺跡をはじめ、隣接する大谷溜池からも石鏃・剝片・石核等が河野氏によって採集されており、ここに新しくとも縄文時代からの人々の生活の舞台が明らかになってきた。

2. 湯無田遺跡の石器群

1は素材の打面部と末端部にプランティングを施す二側縁加工のもので、やや横長の剝片を素材とする。素材の打面部は完全に除去され、加工が大きく行なわれたことがわかる。腹面側縁の3枚の剝離（落）痕については使用による可能性もある。加工は全て腹面からである。凝灰岩製。最大長1.7cm、最大幅2.3cm、最大厚0.6cm、重量2.3g。

2は小形の縦長剝片を素材とし、側縁の上半部・下半部にプランティングを見るものでこれにより素材剝片先端部は変形されている。基部は欠損。水晶製。最大長1.8cm、最大幅0.9cm、最大厚0.3cm、重量0.5g。

3は小形の縦長剝片を素材とする。打面・打点を残す。一側縁と片側縁上部にプランティングを施す。一側縁側では背面・腹面の両方向からの加工であり、緻密さに欠ける感じを受ける。片側縁上半部のものは、腹面からのものであるが、これも大まかである。打面部には素材剝片剝取前の打面調整痕が見られる。末端部を欠損する。水晶製。最大長1.9cm、最大幅1.1cm、最大厚0.3cm、重量0.8g。

4は横長の剝片を素材とするもので、腹面側からの3枚の剝離が見られる。おそらく一側縁全体に統くものではなかったか。それは加工途中のものかは定かでないが、大きな剝離によって切られており、その後欠損したものと考える。剝離の位置と素材の打面部の位置を考えたとき、ここには大きく急斜度な加工を想定しなければならない。少し疑問は残るが、この剝離痕はプランティングと見て良いのではないか。一応ナイフ形石器として捉えておく。また背面には節理面が見られる。メノウ製。最大長1.2cm、最大幅3.1cm、最大厚0.4cm、重量2.0g。

5は横長の剝片を素材とし、その打面部と末端部に二次加工を施すものである。打点、それに打面の半分を残す。先端部加工の一部はノッチ状を呈する。打面部の加工は背面側より先端部の加工は腹面側より施される。また片側縁は欠損している。器種認定に関してはナイフ形石器として捉えておく。（ノッチド）スクレイパーとも見れようか。黒曜石製。最大長1.6cm、最大幅2.8cm、最大厚0.6cm、重量2.4g。

6は縦長の剝片である。片側縁は欠損である。打面・打点を有する。背面の観察により、

数方向からの剥離が存在したことがわかる。非常に小形の剥片であるが、当遺跡でのナイフ形石器の素材としても充分成り立つものであろう。水晶製。最大長1.7cm、最大幅1.2cm、最大厚0.3cm、重量0.6g。

7は横断面三角形状を呈するもので、端部は欠損する。両側縁は大まかな剥離であり、稜上加工等は施されていない。一部礫面を残している。器種認定に関しては、大きく捉えてポイントとしておきたい。先端部はそれほど鋭くはない。時期の帰属は不用。讃岐岩質安山岩製。最大長3.1cm、最大幅1.8cm、最大厚0.6cm、重量2.7g。

8は上部・下部あるいは両端を欠損する“両面加工の石器”である。欠損部を想定して厚みとの関連を考えるとき、非常に平らなものになる。加工に関しては両端部において精密な剥離が施されており、例えば刃部としてここを強く意識しているかのようでもある。器種認定に際して、大きくポイントとして捉えることにも疑問が残る。時期の帰属も不明。玻璃質安山岩製。最大長5.0cm、最大幅3.4cm、最大厚0.7cm、重量16.1g。

9は横長の素材を用いるもので、末端部を刃部とし、緻密な刃部を作出する。側縁部の加工に注意しておきたい。器種は不明であるが、大きく捉えればスクレイパーである。時期の帰属も不明。凝灰岩製。最大長3.1cm、最大幅8.1cm、最大厚1.1cm、重量24.1g。

湯無田遺跡においては今回発表以外の採集遺物に、剥片約200点、縄文期の石鏃約50点がある。使用石材には黒曜石（姫島産を含む）・安山岩・水晶・チャート・メノウがあり、石鏃においては黒曜石・安山岩のみを用いる。水晶については縄文期以前の代表的石材と考える。最後になったが、ナイフ形石器については、水晶製のものは小形の縦長剥片を素材とし二側縁加工という非常に特徴的なものである。他の石材のナイフ形石器も主として二側縁加工であるが、横長の剥片を素材にするという点に相違がある。

3 おわりに

山口地方における最高学府としての使命と責任を持つ大学の果たす役割を考えるとき、特に地域住民との交流、そして学問の還元の意味からも、当資料館の役割は大きいと考える。考古学というのは一般市民にとって最も身近な学問であるにもかかわらず、嫌厭されている傾向にある。それは一言でいえば難しすぎるということで、考古学者の怠慢に他ならない。我々はこの点を再認識した上で、地域住民を中心に広く考古学の還元を行なう必要があり、特に当資料館の存在価値がこのことに立脚することは忘れてはならない。

この稿をまとめるに当たり、分布図・地名表の作成では三浦文夫氏、石材に関しては松

本巻夫氏・富樫孝志氏、地質・地形の面からは松里英男氏の御教示を頂いた。また特に河野豊彦氏には諸方々への御紹介を頂き終始暖かく見守って下さった。河村吉行・杉原和恵両氏をはじめ、他に多くの方々にお世話になっている。このノートが各方面で活用されることを願い、ここに改めて御援助頂いた方々に感謝の意を表したい。

〔注〕

- 1) ここではたとえ1点のみの表採地点でも1遺跡として把握した。今回新たに発表できた遺跡に関しては三浦文夫氏の御教示を得た。昭和62年度内も表採・発掘調査により新たな資料の増加が見られ、宇部市山口大学医学部構内でもナイフ形石器・スクレイパー・細石核・縦長の剥片等が検出されている（当年報Ⅳに掲載予定）。
- 2) 石材に関しては全てを実見していない。基本的には参考文献より抽出した。また富樫孝志氏の御教示を得た。
- 3) 現在疑問視する説が有力である。『第四紀研究』第20巻第3号（1981年）他。
- 4) 当地域の地下湧水は14~15mでも見られることを地元の方にお教え頂いた。

〔引用・参考文献〕

- 1) 山口県旧石器文化研究会『長辯遺跡発掘調査概報』（1985年）。
- 2) 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(1)~(6)」（『古代文化』第35~39巻、1983~1987年）。
- 3) 黒田末寿・片山一道・市川光雄『人類の起源と進化』（有斐閣、1987年）。
- 4) 山口地理学会編『山口の地質をめぐって』（築地書館、1982年）。
- 5) 小野忠熙編著『日本の古代遺跡 山口』（保育社、1986年）。
- 6) 鈴木忠司編『先土器時代の知識』（東京美術、1984年）。
- 7) 辻誠一郎「後期更新世の自然環境」、長谷川善和「動物相」（『季刊考古学』第4号、雄山閣、1983年）。
- 8) 宮本公胤「宇部市域の先土器文化」（『宇部地方史研究』第3号、1974年）。
- 9) 高橋慎二「小郡湾周辺における先土器時代遺跡の実態とその考察」（『山口県先史時代表採遺物集成ならびに編年研究』、周陽考古学研究所報Ⅰ、1978年）。
- 10) 鈴木啓治「最終氷期の植物相と植生」、亀井節夫・広田清治「最終氷期の動物相」、中川久夫「最終氷期－日本における研究の現状から」（『月刊地球』第5巻第1号、1983年）。
- 11) 亀井節夫・ウルム氷期以降の生物地理総研グループ「最終氷期における日本列島の動・植物相」、中川久夫「最終氷期における日本の気候と地形」（『第四紀研究』第20巻第3号、1981年）。
- 12) 宇部市教育委員会『宇部の遺跡』（1968年）。
- 13) 宇部市史編集委員会『宇部市史』（1963年）。
- 14) 鈴木忠司編『寺谷遺跡』（1980年）。
- 15) 山陽町史編集委員会『山陽町史』（1984年）。
- 16) 河村吉行「堂道遺跡出土の旧石器～縄文時代の石器」（『堂道遺跡』、山口市埋蔵文化財調査報告第24集、山口市教育委員会、1987年）。
- 17) 杉原莊介編『日本の考古学 先土器時代』（河出書房新社、1977年）。
- 18) 藤野次史「旧石器時代の遺物」「毛割遺跡」（山口市教育委員会、1983年）。
- 19) 高橋英太郎・河野通弘・長尾恵・大浜迪郎「宇部地域の洪積層」（『山口大学教育学部研究論叢』第7巻第2部、1957年）。
- 20) 河野通弘・高橋英太郎・小野忠熙「本州西端部の洪積層とその問題」（『山口大学教育学部研究論叢』第14巻第2部、1964年）。
- 21) 山口県『土地分類調査 宇部東部』（1972年）。
- 22) 那須孝悌「先土器時代の環境」（『日本考古学 2 人間と環境』、岩波書店、1985年）。
- 23) 小野忠熙編『山口県の考古学』（吉川弘文館、1985年）。
- 24) 財山口県教育財團・山口県教育委員会『綾羅木郷台地遺跡（上ノ山地区）』（山口県埋蔵文化財調査報告第91集、1986年）。
- 25) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年）。
- 26) 山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（小串構内）医学部体育馆新館に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年）。
- 27) 東北歴史資料館『江合川流域の旧石器』（1985年）。
- 28) 宝川昭男「下関市武久町の洪積層出土尖頭器」（『考古学ジャーナル』71号、1972年）。

先土器時代の山口地方

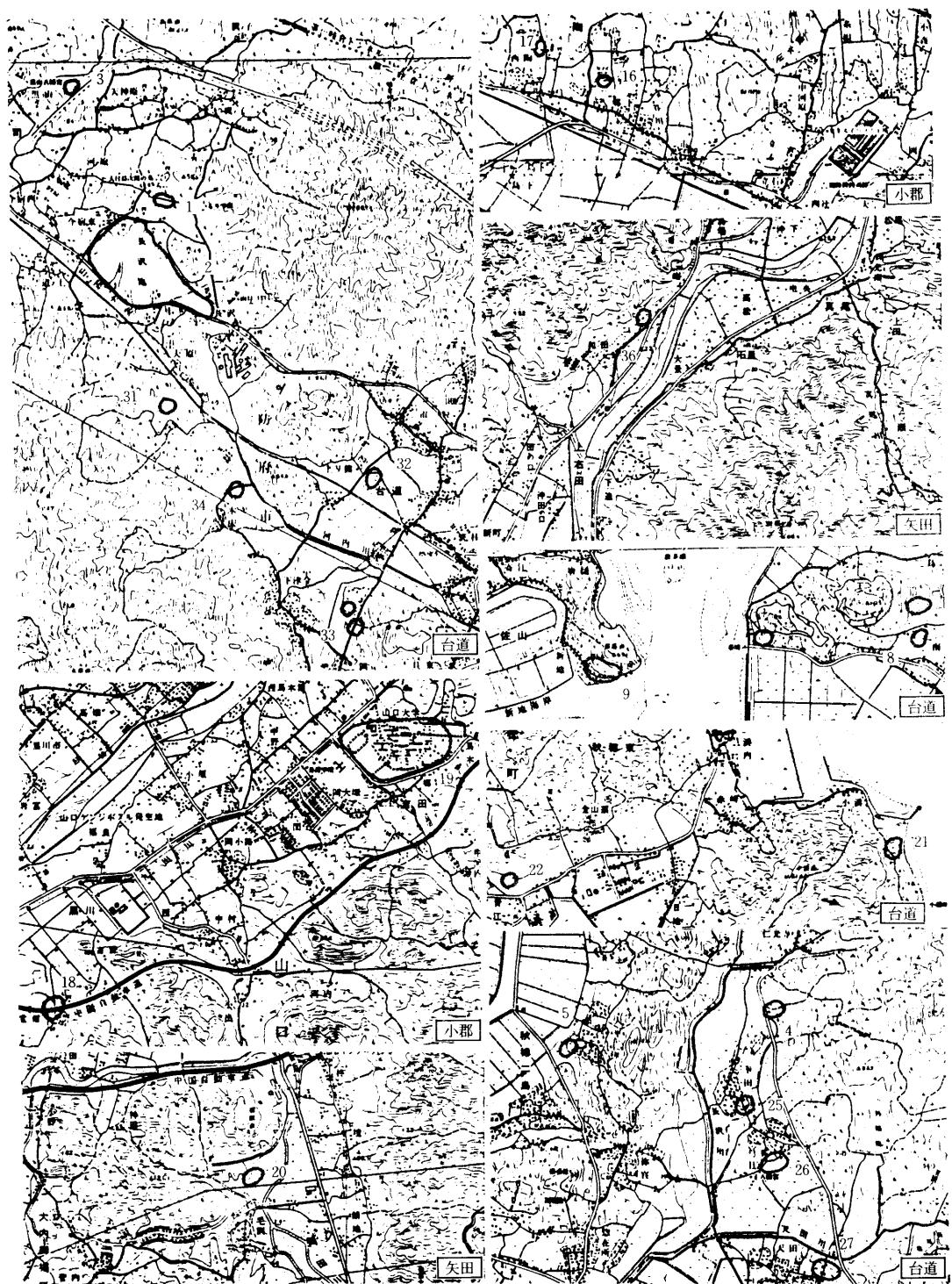


Fig. 98 先土器時代遺跡分布図(1)



Fig. 99 先土器時代遺跡分布図(2)

先土器時代の山口地方

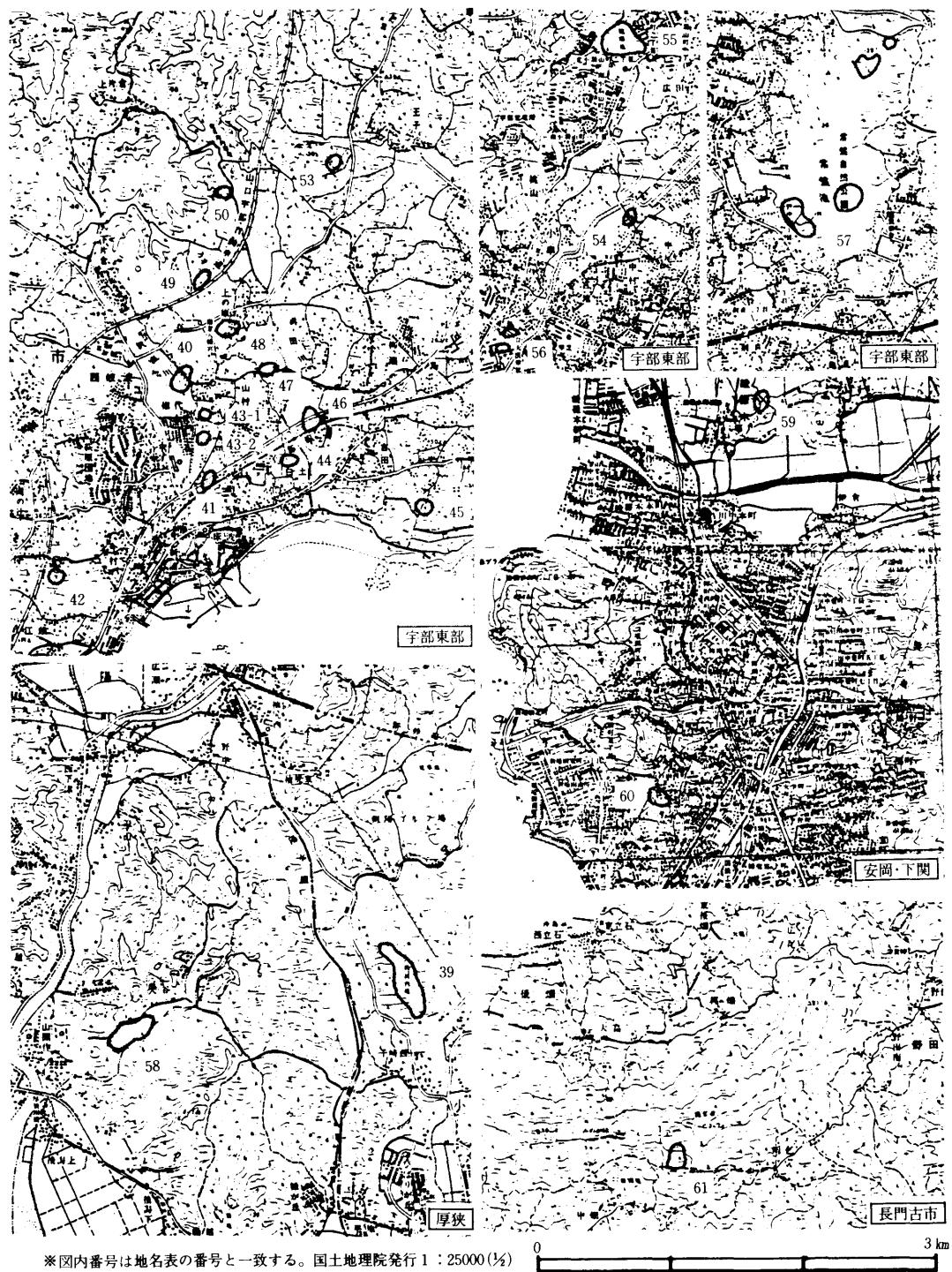


Fig. 100 先土器時代遺跡分布図(3)

Tab. 15 山口地方先土器時代遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	海抜標高(m)	石器組成	使用石材	黒曜石と の共伴	安山岩と の共伴	地区	文献
1	河原	山口市銚銭司河原	20	細石刃、ナイフ形石器	黒曜石、玻璃質安山岩	玻璃質安山岩	安山岩	Ia	2)、9) ※標本と同
2	長池	山口市銚銭司今宿	20	細石刃、ナイフ形石器、スクレイバー 石核、剝片	黒曜石、頁岩	頁岩	安山岩 珪質頁岩	〃	2)、9) 23)
3	和西	山口市銚銭司和西	20	ナイフ形石器、剝片	黒曜石、安山岩	安山岩 珪質頁岩	黒曜石 珪質頁岩	〃	2)
4	仁光寺	山口市秋穂二島守光寺	5~10	ナイフ形石器、剝片	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	〃	2)
5	原の箭	山口市秋穂二島大里	5~10	ナイフ形石器、剝片	安山岩	安山岩	なし	〃	2)
6	美濃ヶ浜	山口市二島美濃ヶ浜	15~25	ナイフ形石器、スクレイバー 石核、剝片	黒曜石、安山岩 水晶、流紋岩 玉すい、 流紋岩、玉すい	安山岩	黒曜石、 玉すい、 流紋岩	2)、9) 23)	
7	長崎	山口市二島長浜	10	細石核、細石刃、剝片	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	〃	2)、9)
8	幸崎	山口市二島幸崎	10~20	細石刃、ナイフ形石器、スクレイバー 尖頭器、台形様石器、剝片	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	〃	2)、9)
9	櫻尾	山口市佐山唐櫻	10~20	ナイフ形石器、尖頭器	黒曜石、玻璃質安山岩	玻璃質安山岩	安山岩	〃	2)、9)
10	ノ見ヶ丘	山口市佐山東佐山	20	ナイフ形石器	安山岩	安山岩	なし	〃	2)
11	向川	山口市佐山油良向川	10	スクレイバー	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	〃	2)
12	下中	山口市嘉川中野下中	10~20	ナイフ形石器	安山岩、水晶	安山岩	水晶	〃	2)
13	原桑	山口市江崎原桑	20	ナイフ形石器、剝片	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	〃	2)
14	前村	山口市江崎岡屋前村	5	ナイフ形石器	安山岩	安山岩	なし	〃	2) ※標本と同
15	今津	山口市江崎東今津	20~25	ナイフ形石器、剝片	黒曜石、安山岩 水晶、メノウ	安山岩、水晶 メノウ	黒曜石、水晶 メノウ	〃	2)、9)

No.	遺跡名	所在地	海抜標高(m)	石器組成	使用石材	黒曜石との共伴	安山岩との共伴	地区	文献
16 正 護寺	山口市陶郷下	5 剥片	安山岩			なし	なし	1a 2)	
17 山 田	山口市陶西陶	10~20 スクレイバー	安山岩	黒曜石(姫島)、水晶		なし	なし	2)	
18 堂 道	山口市大字黒川字大歳	20 細石核、ナイフ形石器、剥片 打面再生剥片、剥片	黒曜石、水晶					16)	
19 吉 (山口大学構内)	山口市大字吉田1677-1	19 細石刃、ナイフ形石器	黒曜石、チャート	チャート				当年報 掲載予定	
20 毛 剥	山口市大字下小野字造ヶ原	53~55 ナイフ形石器、使用痕剥片 打面再生剥片、剥片	玻璃質安山岩 貝石、水晶					18)	
21 小 浜	吉敷郡秋穂町大海小浜	5~10 細石刃、ナイフ形石器	黒曜石、玻璃質安山岩 安山岩	安山岩 玻璃質安山岩	黒曜石 玻璃質安山岩			2)	
22 青 江	吉敷郡秋穂町秋穂東青江	10 ナイフ形石器、舟底形石器、剥片	黒曜石、玻璃質安山岩 安山岩	安山岩 玻璃質安山岩	黒曜石 玻璃質安山岩			2)	
23 著 倉	吉敷郡秋穂町秋穂東著倉	10~20 ナイフ形石器、剥片	安山岩			なし	なし	2)	
24 中 道	吉敷郡秋穂町秋穂東中道	5~10 ナイフ形石器、二次加工剥片	玻璃質安山岩 安山岩、チャート	安山岩 チャート	玻璃質安山岩 チャート			2)	
25 幸 田 I 地 点	吉敷郡秋穂町秋穂西字宮ノ旦	5~10 ナイフ形石器	黒曜石					三浦文夫氏 御教示	
26 宮 ノ	吉敷郡秋穂町秋穂西字宮ノ旦	5~10 ナイフ形石器、スクレイバー、剥片	黒曜石			なし	なし	三浦文夫氏 御教示	
27 天 田	吉敷郡阿知須町天田	5~10 細石刃	黒曜石			なし	なし	三浦文夫氏 御教示	
28 岩 上	吉敷郡阿知須町岩上	5~15 細石核、細石刃、ナイフ形石器 スクレイバー、剥片	黒曜石、水晶	水晶				2)、9)	
29 丸 塚	吉敷郡阿知須町丸塚山	5~15 細石核、細石刃、ナイフ形石器						2)、9)	
30 日 ノ	吉敷郡阿知須町小古郷	10 ナイフ形石器	黒曜石 玻璃質安山岩	玻璃質安山岩				2)	
31 宮 ノ	防府市大道大原	15 細石核、細石刃、ナイフ形石器 スクレイバー、剥片	安山岩、貝石 水晶、結晶片岩	貝石 水晶、結晶片岩	貝石 水晶、結晶片岩			2)、9)	

No.	遺跡名	所在地	海拔標高(m)	石器組成	使用石材	黒曜石と 安山岩との共伴	地区文 獻
32 上り	熊 ¹⁴	防府市大道上り熊	5~15	ナイフ形石器	黒曜石	なし	I a 2)、9)
33	山 ¹⁵ 裏	防府市大道旦東	5~15	細石刃、ナイフ形石器、剝片	黒曜石	なし	2)、9)
34	木 ¹⁶	床 ¹⁷ 防府市大道下津合木床	5~10	ナイフ形石器	黒曜石	なし	2)
35 姫	山 ¹⁸	防府市右田大崎日ノ本	10	ナイフ形石器	黒曜石	なし	2)、9)
36 和	田 ¹⁹	防府市大字上右田字輪 ²⁰	40~50	ナイフ形石器	黒曜石	なし	三浦文夫氏 御教示
37 湯	ノ ²¹ 鮮 ²²	防府市大字中間字田島湯ノ鮮	5	ナイフ形石器、剝片	玻璃質安山岩	なし	三浦文夫氏 御教示
38 丸	山 ²³	防府市向島丸山	10~20	ナイフ形石器	安山岩	なし(?)	三浦文夫氏 御教示
39 西 ²⁴ ヶ ²⁵ 河 ²⁶ 内 ²⁷	池 ²⁸	小野田市東高泊干崎	20	ナイフ形石器、スクレイバー、舟底形石器	安山岩、メノウ	メノウ	I b 2)、9)
40 南 ²⁹	方 ³⁰ (渴)	宇部市西岐波区山村	30~35	細石核、細石刃、ナイフ形石器、スクレイバー、舟底形石器 斬器、台形石器、櫛形石器、新片尖頭器	黒曜石、安山岩、チャート、貝岩、水晶 安山岩、チャート、貝岩、水晶	黒曜石、チャート、貝岩、水晶 1)、2) 9)	
41 本 ³¹	郷 ³²	宇部市西岐波区本郷	10~15	細石核、細石刃、ナイフ形石器、スクレイバー、舟底形石器 尖頭器、櫛形石器、打面再生剝片	黒曜石	なし	メノウ
42 筒 ³³	辻 ³⁴	宇部市西岐波区大沢	10	ナイフ形石器、剝片		なし	メノウ
1 長 ³⁵ 樹 ³⁶ 第1地	点 ³⁷	宇部市西岐波区山村長樹	19	細石核、細石刃、ナイフ形石器、スクレイバー、舟底形石器 台形櫛石器、櫛形石器、石核、剥片、石鑿	黒曜石、玻璃質安山岩、安山岩 チャート、水晶、メノウ、シリカ	安山岩、玻璃質安山岩 チャート、水晶、メノウ、シリカ	メノウ
2 長 ³⁵ 樹 ³⁶ 第2地	点 ³⁷	宇部市西岐波区山村長樹	19~20	細石核、細石刃、ナイフ形石器、スクレイバー、舟底形石器 台形櫛石器、石核、打面再生剝片、馬辺加工石器	黒曜石、安山岩、チャート、貝岩、 水晶、メノウ、シリカ、シルト岩、玉子型 シリト岩、玉子型	安山岩、チャート、 貝岩、水晶、メノウ、シリカ、シルト岩、玉子型	メノウ
44 白 ³⁸	土 ³⁹	宇部市西岐波区白土	5	細石核、細石刃 剝片尖頭器、周辺加工尖頭器	黒曜石、安山岩、メノウ	安山岩、メノウ	メノウ
45 吉 ⁴⁰	田 ⁴¹	宇部市西岐波区吉田	5~10	ナイフ形石器	安山岩	なし	メノウ
46 神 ⁴²	田 ⁴³	宇部市西岐波区白土 ⁴⁴ 柳 ⁴⁵	10~15	細石核、ナイフ形石器、スクレイバー、尖頭器、舟底形石器、二次加工剝片 使用剝片、石核、打面再生剝片、新片、周辺加工石器	黒曜石、安山岩、チャート 水晶、メノウ、玉子型	安山岩、チャート、 水晶、メノウ、玉子型	メノウ

先土器時代の山口地方

No.	遺跡名	所在地	海拔標高(m)	石器組成	使用石材	黒曜石と の共伴	安山岩と の共伴	地区	文献
47	上ノ原	宇部市西岐波区上ノ原西垣	15~20	細石刃、ナイフ形石器、スクレイバー、舟底形石器 (舟形)石器	黒曜石、安山岩、安山岩 頁岩、流紋岩、シルト岩、珪質岩	安山岩、玻璃質安 山岩、頁岩、流紋岩 シルト岩、珪質岩	黒曜石、安山岩 1b	1)、2)	
48	南方(隅)裏	宇部市西岐波区上ノ原2426	30	ナイフ形石器	メノウ			“	1)、2)
49	谷後	宇部市西岐波区上ノ原清水	30	ナイフ形石器、尖頭器 舟底形石器、周辺加工尖頭器	黒曜石、安山岩 チャート、水晶	安山岩 水晶	黒曜石、チャート 水晶	“	1)、2)
50	西吉沢	宇部市西岐波区上片倉西吉沢	30	細石刃、ナイフ形石器、舟底形石器	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石	“	1)、2)
51	前田(北)	宇部市東岐波区前田	10~20	ナイフ形石器、剝片、石斧	水晶、玉ずい			“	1)、2)
52	平原	宇部市東岐波区大田平原	10	舟底形石器	黒曜石		なし	“	1)、2)
53	本山	宇部市東岐波区本山718-1	25~30	ナイフ形石器	安山岩		なし	“	1)、2)
54	川津	宇部市上宇部中村川津	10	ナイフ形石器	チャート			“	1)、2)
55	蛇池	宇部市川上広田蛇池	30	剝片	玉ずい			“	1)、2)
56	山口大学医学部構内	宇部市大字小串1444	1.5	細石核、ナイフ形石器 スクレイバー、剝片	黒曜石、玻璃質安山岩 チャート			“	26)、当年解 説載未定
57	常盤池	宇部市常盤池	20	細石刃、ナイフ形石器、スクレイバー 剝片、尖頭器	黒曜石、安山岩、頁岩 水晶、結晶片岩	安山岩、頁岩 水晶、結晶片岩	黒曜石、水晶 結晶片岩	“	1)、2)
58	湯田	厚狭郡山陽町大字 郡字湯田溜田2374	30~40	ナイフ形石器、剝片	水晶、チャート、流紋岩			“	河野豊彦氏 御教示
59	綾羅木(上)山地	下関市大字綾羅木大義恵のふ田	8~10	細石核、細石刃、ナイフ形石器	黒曜石	なし		U	24)
60	笹山	下関市武久町1丁目笹山	30	尖頭器	黒曜石	なし		“	28)
61	雨乞	大津郡日置町雨乞	340	ナイフ形石器、剝片	黒曜石	なし		III	23)